

姫路市史 第八卷

史料編 古代中世 1

監修 神戸大学名誉教授
八木 哲 浩



薩山宿での合戦 太平記絵巻 三時知恩寺蔵

第十五回配本『姫路市史』第八巻史料編Ⅰ古代中世をお届けします。

本巻は編年の形をとり歴史上のできごとを網文に著し、その基となった史料をつけるという形にしています。古代中世をこういう形で著したことは姫路市史では初めてのことで、昭和四十九年に旧姫路市史「史料編Ⅰ」が刊行されてから播磨の古代中世の解明が急速に進みましたが、ここでひとつの集大成ができたといえるでしょう。

第Ⅰ章は古代編年とし、記紀の時代から播磨国が出てくる文献史料を採り上げました。必ずしも今の姫路市域とは限りませんが全体を通してみれば播磨国の雰囲気や立場などがわかるでしょう。平安、特に摂関時代では書写山円教寺の繁栄ぶりが際立っています。またおもしろいところでは飾西郡実報寺の僧、戒覚が永保一二年（一〇八二）に宋に密航したときの記録などもあります。

第Ⅱ章は中世編年として梶原景時が播磨国守護を任命される寿永三年（一一八四）を鎌倉時代として始めました。守護と官人のせめぎあい、悪党の蜂起、御家人広峯氏の活躍などを収めています。南北朝・室町時代には足利尊氏に属した赤松氏の活躍と繁栄、嘉吉の乱にいたる様々な動き、乱の詳細な記録、赤松氏の再興などが主なテーマですが、林田庄関係の吉統記紙背文書や正長の土一揆に関連した勧修寺経成書状など今回の調査で初めて発見された文書も掲載しています。戦国時代は応仁元年からです。細川氏を後ろ盾にした赤松政則から始まる後期赤松氏の活躍、群雄割拠の時代の浦上・小寺・赤松・別所氏などが入り乱れて東西取り合い合戦など、当時の人々の心意気が豊富な史料の間から見えてきます。そして最後は織豊時代として御着城・英賀城の陥落までを黒田孝隆の動きを中心として逐一追ってゆきました。江戸時代に九州福岡の黒田官兵衛の許に身を寄せた小寺氏の子孫の方が持つておられた小寺家文書も初めて世に出ます。この時代の史料を順序だつてまとめたのは姫路市としては初めてのことで。

第Ⅲ章には古代別編として播磨国風土記・万葉集をはじめ文芸などの世界で残っている播磨の記録を幅広く集めました。古代から播磨の庶民が生産にはげみ日々の生活をどのように送っていたのかが垣間見えるところ です。

つづく第九巻では史料編Ⅱ中世として姫路に残る中世文書を家分けにして一括し、庄園別史料や中世の文芸などを掲載する予定です。

